

80年代思想と訣別するために

1991-14⑨ - 1/3

現代思想入門の入門

対談

竹田青嗣
Takeda Akihiro

橋爪大三郎
Hashizume Daizaburo



竹田青嗣 1947年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒。文芸評論・思想・音楽と幅広く活動。主な著書に『現代思想の冒険』(毎日新聞社)『現象学入門』(NHKブックス)『自分を知らるための哲学入門』(筑摩書房)など。



橋爪大三郎 1948年生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程終了。東京工業大学助教授。主な著書に、『仏教の言説戦略』(勁草書房)、『はじめての構造主義』(講談社)、『冒険としての社会科学』(毎日新聞社)、『現代思想はいま何を考えればよいのか』(勁草書房)など。

「市民」としての方法

橋爪大三郎『現代思想はいま何を考えればよいのか』
四六判242頁 1957円 勁草書房
竹田青嗣『自分を知らるための哲学入門』 四六判248頁
1130円 筑摩書房

社会主義か資本主義か、保守か反動か、
市民主義かラディカリズムか…といった
二項対立図式が無効になった現在
普通の人間として考えるとはどういうことか——
現代の思想状況を踏まえつつ竹田・橋爪両氏に対談願った

竹田 橋爪さんの『現代思想はいま何を考えればよいのか』という本を読んだ感想をまずいかに言ってみます。いままで社会というものを考える時、まず一つの理想なり正義というものが思い描かれ、その理想をどうしように表現するかという問題が思想の大きな課題だったと思えます。理想や正義をいかに実現するかという時に今まではマルクス主義のプランがあったわけですが、それが七〇年代に壊れた後、ポスト・モダンニズム—マルクス主義、あるいはヘーゲルを含めた近代主義としてのヘーゲル—マルクス主義を否定するようなポスト構造主義が出てきた。

ただ、せいじ氏 1947年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒。文芸評論・思想・音楽と幅広く活動。主な著書に『現代思想の冒険』(毎日新聞社)『現象学入門』(NHKブックス)『自分を知らるための哲学入門』(筑摩書房)など。

橋爪さんの立場というのは、資本主義か、社会主義か、保守か反動か、市民のかラディカリズムか、といった対立の軸をいったん全部チャラにするところからはじめていく。普通の人間が市民として生きていくというのをいっただん認めて、その上でその社会を改めて考えていくという道すじで考えればよいのかという—そういう発想がらや直している。僕は現在の思想状況の中で、こういう発想をどうにか強いリアリティを感じました。社会思想というものを僕はちょっと中断しておきたいようなところがあつたんだけど、橋爪さんのような考え方は一緒に参加してみたいという気がします。

橋爪 「市民」ということを今おっしゃいました。どうしてそういう考えになったか、私なりに整理して申し上げると、六〇年代に団塊の世代が、抑圧から自由になろうと解放されようといういろいろなことをやってみた。成功しなかったけれど、それは「敵」が

大きかったせいではなくて、自分たちのやり方が悪かったせいだと、みんな考えたと思う。そこで私が一番気になったのは、人間は自由になるために、一切の拘束や構造をなくさなければならぬのか、ということなんです。

人間は、何らかの制約や構造を身に負っているもので、それを否定するだけでは決して自由になれないと、私は思った。人間は言葉を喋る。言葉を抜きにしてしまったら狂気になるだけで、自由にも幸せにもなれない。人間にとって疑うことのできない信頼すべき部分がある。例えば言語という形である。では、社会のうちどなただけがそのどなただけがそうじゃないのか—そこがなかなか解けなくて、それで全否定に突っ走って失敗したのだと思いたいです。

初めに言葉の与える秩序を考えて、構造主義に行ったらんです。それでも十分な解決が得られなくて、次に考えたのが法律—ルールの問題でした。これは言葉よりもちょっと制度に近いんですけど、人間と人間が何をしても、何をしてもいけないかというのが法律です。それまでマルクス主義は、法律に非常にマイナスイメージを持っていました。階級対立を隠蔽するものだから、「全部無くていいんだ」とこの発想は、当時かなり影響力があつて、私も信頼していた吉本隆明さんも比較的そういう考えだった。吉本さんに代表されるような日本型の知識人は、みんな法律に不信感を持っていた。

私はある時に、そうじゃないんだって思い始めたんです。人間が従うべき規則(法

竹田 それは橋爪さんの言う法が憲法をもつていっぺん問題にしてしまつて同じことだと思ひます。なんのために法があつて、なんのために憲法や法にわれわれが関わるのか。それは僕の力点で言うところ、理想のために関わっているんじゃないですか。

つまり人間が集まって生きる上でどうしても起るトラブルというものがあつて、それをどう適切に処理するかを大なり小なり誰もが考える必要がある。それが必要不可欠だといふ視点で橋爪さんはその問題を考へている。そこは今まで理想を押し立てた民主主義とは全然違いますね。

思想というものの存在理由

竹田 繰り返しになるかも知れませんが、日本の近代の思想というのは、しようがない面もありますが結局ロマン主義の形を取つていた。正しい理想は何であるか。その理想をどう実現するか。それが八〇年代の思想まで続いてきた。最後にポスト構造主義の反社会的ライカリスムにさつた。

最近の思想は、急にテクニクばかり覚えて、足腰がついていかないプロ野球の二重選もつ一大きいのは、ポスト

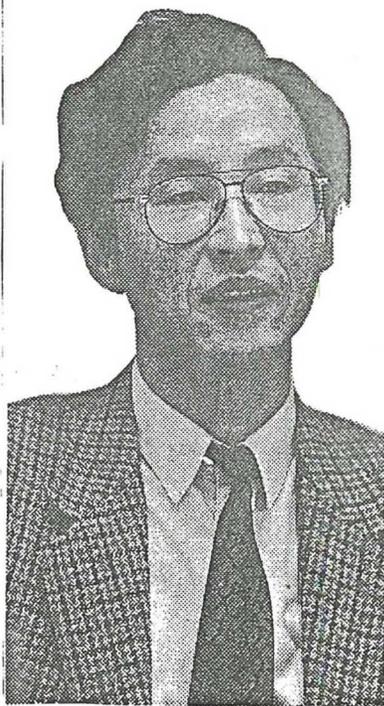
根を持たない、自分たちの民族性の中で一度も鍛えられたことがないような思想が、簡単に流通してしまつてですね。どこかよき方向をくいつたという理由だけで、そういう知的空間は、決して自立しているとは思へない。だから、歴史の見なおしをちゃんとやらないと、将来知的な成熟を迎えることができないだろう。日本の思想として、いつも若くあつたとして過ぎたんだと思つてます。

いいと思つてます。基本的にいろいろな人間の合意というものが社会というものを成り立たせていて、そこから出てくるトラブルはそれは改変できる変え得るんだと考へた方がいい。それは単に希望で言っているだけであつて、ポスト・モダニズムにおける主体と制度の二元論の見方は原理的に人間と社会の関係を捉えそこなうと思つてます。

もう一つ重要な問題だと思つたのは、僕の世代には、こちが一生懸命にいいことを考へてもそのことを現実化できるとかどうかというところに対する大きな疑いがあつたわけですね。それが今の日本や先進国の状況は、全くパイプがないという状態ではない。現代社会をポスト・モダニズムが

言うようなシステム社会だと考へる必要はまったくないと思つた。そこをいっぺん振り捨てないと思つた。その前のモダニズムに対して、あるリアリティを突きつけた部分も人間が何のために思想や理論を手にするのかというその意味が、ポスト・モダニズムの中では死んでしまつた。

1991-142-3/3



入門の入門

現代思想

に制度と言へば、それは社会の仕組みの問題で、その中の人間は制度と相関的に生きてる現実を体験してついでに制度は絵に描いたものではない。最終的には一人一人の生きる態度だ、私には思う。一人一人が生きる態度の中に、社会の制度がある。新しい制度を考へる、新しい生き方のスタイルを考へる。自分ごとにあつてそれを実行してきて、まずかつたらやめ、いい制度だったらどんどん広めていくというスタイルが、システムを潰していく。これが、八〇年代の思想と訣別する方法だつて、今ちょっと思つておいてほしい。

竹田 それは非常によく解ります。もちよつと別の観点から言つて、七〇年代から八〇年代にかけてマルクス主義の崩壊というのがあつて、その後ポスト・モダニズムが出てきた。それで思想というものの信頼がどんどんなくなつてきた。そこで今までなん

うえでまずいちはん切実なトラブルをどう処理するかという仮説のかたちをとるほかはない。これを正していんだというロマン的な態度を捨ててしまえば、いろいろな仮説を立てて制度や硬化した慣習を変えていくことができると思つた方がいい。

もう一つ重要な問題だと思つたのは、僕の世代には、こちが一生懸命にいいことを考へてもそのことを現実化できるとかどうかというところに対する大きな疑いがあつたわけですね。それが今の日本や先進国の状況は、全くパイプがないという状態ではない。現代社会をポスト・モダニズムが

何のために思想や理論を手にするのか
というその意味が
ポスト・モダニズムでは死んでしまつた(竹田)



写真真撮影＝宮内勝

対談 現代社会の思想・哲学入門

自分の生き方と社会の問題は いかにつながるのか

普通の人々が納得する思想が大事

竹田 僕が、ずっと考えていることの一つに、哲学や思想は専門家だけがわかっていて、普通の人々がそれをわかっていないというのでは、ゼンゼン意味がないということがあります。なぜ人生や社会・世界の問題を考えるのかというのを普通の人々が納得して、しかもその一番の原理というか、根っこ部分が腑に落ちないと意味がないということとです。ところが、どうも最近の思想や哲学というものは、ただ勉強好きな学生に知的興奮だけを与えるものになっているんじゃないかという根本的な疑問があったんです。

それで『哲学入門』（ちくまライブラリー）という本を書いたんですが、橋爪さんが今度出された『現代思想はいま何を考えればいいのか』（勁草書房）という本を読んで、期せずしてまったく同じようなモチーフを持つてらっしゃることに、とても共感を覚えたんです。

橋爪さんは一見、以前の、善意ある民主主義的な考え方に似ているけれども、古い民主主義とはまったく違う。橋爪さんの考え方は、保守か革新か、右か左かという、つまり理想をどう実現すればいいかというような発想をすべて切り捨てている。いまや誰もが普通の市民として社会という共同体を構成しているという前提に立ったほうがいい。そうであれば、社会で解決しなければならぬ矛盾が出てきたときに、この問題は解決しないと自分自身にとっても具合が悪い問題だということも腑に落ちれば、誰でもその問題にかかわっていくだろう。そういう発想に立っているわけです。

こういう形で社会の問題を提起していくなら、人間がそれぞれ自分の生

をどう生きるかという問題と、社会の問題をどう考えるかというところが繋がっている、と思ったんです。

橋爪 私も竹田さんと同じようなことを考えていたんです。日本では知識というものは、ずっと長い間背伸びしてやってきたんだなあ、という思いです。どこかよきで、背伸びしている分、隠れている部分があったような気がするんです。

それで、なんとか日常のなかで、思想をとらえ返したいと考えるようになったんです。生きていくことと同じことである思想、その人の歩みと同じような自然な思想、最後まで自分の信念としてつきあっている思想でなくては、意味がないと思ったわけです。

普通の人々は、疲れますから背伸びは

権力の根っここの部分をどうとらえるか

竹田 たえば権力の問題があります。いままでは一握りの支配階級と、その権力によって押さえつけられている大衆という図式があったわけです。その

図式が、少しずつ変わらざるをえなくなっている。

権力の問題を考えた一番代表的な人はミッシェル・フーコーですが、彼はいい、実はさまざまな局面でさまざまな網の目として権力の制度というものがあるんだと言いました。そして知の問題、人間の主体ということ、権力というこの三者の関係を非常に詳しく歴史的に説いています。

そのフーコーの影響で、現代社会のさまざまな構造は一つの権力の制度性として考えられるようになったわけです。たとえば教育という問題、男と女の関係の問題、医療の問題というようにさまざまな局面で、権力関係がどのように機能しているかを調べて考えていく。そして今の社会のこういう制度構造がいけないんだ、ここに権力があるんだというような社会学的な研究が多く出てきた。

だけど、僕にはどうもそのやり方に



大きな違和感があります。フーコーはそういう形でいろんな権力の網の目があるんだと言ったんじゃないかと思うんです。

権力の問題を、単に誰が権力を持っている、したがって誰を倒せばいいんだというふうな問題で考えていくと、権力の一番根っこというものはとらえられない。そうではなくて、社会の矛盾の存在理由をどんどん追いつめていくと、実は具体的な人間関係、あるいは集団と集団の利害関係、そういうものの網の目の中に、いまある大きな権力が支えられているおおもとがあることがわかる。彼は、この問題が実は権力問題の根っこだということを示したのであって、制度イコール権力だから制度が駄目だ、といっているのではないのです。橋爪さんも、フーコーの影響下にある現在の多くの権力論に対する異和感を書いておられた。

そこで権力というものを、どうとらえるかについて、橋爪さんはどう考え



敦煌の光彩

美と人生を語る

敦煌研究院 名誉院長 常書鴻 池田大作

敦煌を通じて結ばれた魂が、仏教美術を中心に芸術観、人生観について語る珠玉の対談集!!



徳間書店 行105-55東京都港区新橋4-10-1 TEL. 03(3433)6231

ていらっしやるのか、お聞きしたいの
です。

橋爪 いまおっしゃったように、フー
コーが現れる以前、権力は、誰が権力
を持っていて誰を支配しているのかと
いう問題だったんです。これを、権力
の制度と言っています。これを、権力
に対してフーコーが言ったのは、そう
いう権力の制度を生み出すもつと細か
な社会関係の網の目のようなものがあ
るということでした。それを、大きな
権力と言ってもいいし、権力を生み出
す権力、つまり原権力といってもいい
それは形がなくてグニャグニャしてい
るんです。で、その権力にハッキリ
名前を与えて、たとえば王様が権力を
振るうのは正しい、と言うことにな
るのである。

近代は市民が権力を積極的に作りだ
した時代です。市民革命がそれです。
それと相前後して、主体というものが
登場した。これは、「市民」と考えても
いい。市民の自立によって、そういう
問題を考えていく知識が権力に從属し
ない形で独立している。こういう配置を制
度化して動いているのが、近代なので
す。それに対してフーコーは、近代の
制度は初めからそうなっているのでは
なくて、ある時期にできたものだし、
その根っこにあるのは人間関係の網の
目のようなものである。こういう面を
見ないと、歴史として近代のあり方を
とらえられないよ、と言ったと思っ
竹田 その通りですね。

自覚を、一人ひとりが日常の中で忘れ
て持てるかということだと思います。
竹田 そういう日常の中の権力関係の
一つに、たとえば嫁、姑、というの
があります。この関係は、嫁、姑という関
係が社会のありようとして当然のこと
であると思われている時代には、それ
ほど大きな抑圧感はないわけですね。
それが、社会の道徳が開けて、女性も
いろんな形で社会的に自己実現できる
そういう生き方の可能性が見出された
ときに、嫁、姑は一つの権力的な制度
だということに意識されるわけですね。
さらに一歩すすんで、一人の人間が自
分が持っている苦しみは多くの人間が
共通に持っている苦しみだというふう
に思ったときに、それに対して異議申
立てをする根拠ができるわけです。
制度の問題というのはそういう問題
であって、もともと制度があつてそれ
に気がつかなかった、というような問
題ではない。つまり、人間の社会的な
欲望の道徳とそれまであった慣習的な
行動との相関数として権力の問題が発
生する、というのが僕の考えなんです。
そして、そういう問題を少しずつ解
いていくためには、ある大きな順序が
あるんじゃないかと思っ
市民社会ということ前提として考
えると、この世の中には理由のない抑
圧的な制度性、ある理由をもつてい
る抑圧的な制度性というのがあると思
います。たとえば、お金がある人は
価値があつて、お金がない人は価値が
ないという考え方は、ある程度理由が

橋爪 そこで私が思うのは、これをう
っかりそのまま日本人が真に受けてし
まうと、微妙な問題が出てくるという
ことなんです。日本の場合、グニャグ
ニャの権力というものは昔からあるけ
れど、近代本来の、権力は権力、知識
は知識、市民は市民という分離がはっ
きり成立していないんです。市民革
命にあたる変化を自覚的に経ていない。
フーコーが言っていた人間関係の中
にも権力はあるよとか、集団の中にも権
力はあるよとかというものは、いわば
当たり前ですね。権力と呼ぶかどうかは
別にしても、そんなこと言われなくても
わかっているわけですね。そうなる
なあいんだという気持ちになるわけ
です。自分たちの日常のあり方はこれ
でよかつたんだと、日本は日本のまま
でいんだねということになってしま
うわけですね。

そうじゃなくて、フーコーの登場は
日本人にとっては、近代というものを
もう一度、別な方法論でもって実現し
ていくという課題を受け取ったことに
ほかならないと、私は思っています。
そして、ヨーロッパの人たちにとつて
は、自分たちだけが近代であり人間で
あると考えるのには思い上がりであるか
もしれない、という反省をつきつけた。
竹田 主体と知と権力という近代の三
角形の形が日本とヨーロッパでは違
うということですね。
そこで、僕がもう一ついいたいのは、
フーコーが晩年の著作である『性の歴
史』の中で、権力は真理のゲームであ

ある。この社会が、この社会として存
立している限り、お金というものが社
会的な力になるわけですから。
ところが、差別という問題はそう
ではない。部落に生まれた人は価値がな
くて、そうではない人間には価値があ
る、というような相対的な価値づけは
社会そのものが動いていくうえで、そ
ういう価値づけを保つべき大きな理由
がなくなっているわけです。
社会的な問題を考えていくときには、
そういう理由のない制度性をまず解
いていくことが必要だろつと思っ
す。もちろんこれは、すべての人がま
ず差別のことを考えよ、というのでは
ありません。社会というものが、少
しでも合理的なものになっていくとす
れば、そういう解決の原理的な順序があ
るといふことですね。
理由のない制度性が少しずつ解かれ
ていくときに、人間が市民であるとい
う感覚の底板が少しずつ上がつて
くる。この市民感覚の底板がせり上が
るに理由のある制度性が解かれていく
えでの前提になるわけですね。
橋爪 権力関係とみえなかつたものも
それ以外の可能性がみえてくると、そ
れに対して文句を言うことができるよ
うになつてくるわけですね。苦しみを
苦しみとして語ることができると、それ
を他の人と分かち持つことができると
明瞭に意識した段階で、はじめてそれ
が権力的な制度だつたとわかる。
それから、あることが差別であるか

社会の問題は自分に結びつく

橋爪 ヨーロッパの権力の制度の伝統
では、市民が自分たちの力で作り出し
た権力は正しくてよい権力だ、とい
うのが基本です。それに対して、市民の作
った権力でもそれは悪い権力なんだと
言い始めたのがマルクス主義なんです。
その後、フーコーが出てくる。市
民社会の創り出した権力は正しいとい
うにみえるが、それは彼らが正しいと言

直すことができるというふう
に考えればいい。僕は、そういうふう
にフーコーを受け取ったわけですね。
そのとき、どの局面で、またどの時
点で、このルールは抑圧的だ、よくな
いと、異議申立てができるのか。その
根拠がハッキリしなければなりません。
さつき言った『性の歴史』を見ても、フ
ーコーの興味は、その根拠を求めよう
とするところにあつたように思います。

どうかの根拠は、確かな実体としてあ
るものではなくて、その根拠を強いて
言つと、それを差別だと正しく言える
かどうかにかかっているわけですね。
これは日本女子大の坂本佳穂恵さんと
いう方がいったことなんです。私
流に名前をつけると、「告発相関主義」
といつて、差別は告発と相関的に表れ
てくるという考え方です。
だから、告発の正しさが完了したと
きに差別は実在したことになる、とし
て消滅すべきものであることになるん
です。この告発の運動によって、不
断に自分たちの制度を点検していく。こ
の手続きを内蔵していなくては、制度
は無意味だと思っ
の自己点検の対象としてあります。そ
して、それは市民の義務なんです。
では、どうして不断に点検しなければ
いけないような制度しか、われわれ
は作れないのかということですね。

これは宿命だと思つ。市民は、さあ社
会を作りましよう、と考えて、合理的
に社会を作るわけではないんです。だ
から、今の社会が、本来あるべき市民
の制度の仮の姿でしかない、という自
覚を持つことが大切だと思っ
たとえば部落の問題でいえば、これ
はある時期の制度が必然的に生み出し
たものでしょう。もともとは機能的な
根拠があつたはずなんです。そういう問
題は無数にあります。告発の数だけある
はずだ。それを全部聞き分けて、自分
の問題として考える。自分の問題とし
て考えなければ、自分の制度をよくす
ることはできないですね。
竹田 その社会的な問題を自分の問題
として考えるということなんです。が、
そのリアリティが特に現代の日本では
失せてしまつている。それにはいろん
な要因があるんでしようけど、思想的
な文脈でいえば一九七〇年代までの民



はしづめ だいさぶろう 1948年、神奈川県生まれ。東京大学大学院社会学研究科修了。東工大助教。性・言語・権力を三つの説明原理とする新しい「記号空間論」を展開。著書に「言語ゲームと社会理論」「仏教の言説戦略」「冒険としての社会科学」などがある。



たけだ せいじ 1947年、大阪府生まれ。早稲田大学政治経済学部卒。現在、文芸評論・思想・哲学・音楽の幅広い領域で活躍。和光大学講師。著書に「(在)日」という根拠」「現代思想の冒険」「陽水の快楽」「世界という背理——小林秀雄と吉本隆明」などがある。

主義とマルクス主義から八〇年代のポストモダンへの移行によって、誰も社会のことを考えなくなった。結局、社会なんて変わらないのじゃないだろうか、という感覚ができてしまったことだと思っただけです。

しかし本当は、社会に理想が実現されていなければ生きられないというのではなくて、いまある社会の中の切実な

思想は科学でなく、

橋爪 現実の社会にはいろいろな壁がありますね。その壁は、制度が作り出したものです。国家が一番典型的ですが、われわれは政治を営むときに、ある範囲の人たちを含めて意思決定するという、政治の壁を作らざるを得ない。経済を営むときには市場が必要になる。こういふ人たちの間で交換する、という枠組みを作らざるを得ない。そういういくつもの壁がある。これはやむを得ないことなんです。

しかし、もしその壁を破ろうと思えば、自分がやむを得ざる必然によってまたまたその壁の内側にいる、または外側にいるということに自覚している必要があります。さらに、制度によって自己規定をするのではなくて、制度を超えた共通項を、制度内外の人びとがいつも探る必要があると思っただけです。市民運動のネットワークにも可能性があると思っただけですが、私はあまり市民運動にウエイトを置きたくありません。制度を外野席で告発する声を大きくする以上に、この制度を動かす現場

矛盾が少しずつでも変わっていく可能性があるかないかということが大事だと思っただけです。そのことが、その社会に生きる人間に希望を与えるし、そこに希望があればそのことを考え続けていく意味があると、誰もが確信するはずなんです。その可能性を思想が提出できれば、社会の問題は自分に結びついてくるわけなんです。

自分の行動

で、誰を内側にし誰を外側にしているかという自覚がいつでも問われ直されていることの方が、はるかに重要だと思っただけです。だから、法律なら法律を動かす法実務家とか、判事とかという人たちの思想が大切だし、政治家なら政治で誰に市民権や参政権を認めて、誰に入国を認めるとか、そういう現場での判断が常に問われ続けることが大切なんです。

社会を変えるという場合の焦点はそこにあります。日本人が市民としてやっつけていこうと思うならば、日本という国を、最終的にはこういう世界に開かれた国家にしていこう、さもないければ日本という国は作ってもしょうがない、とまで進むべきものだと思うんです。それが私が「市民」ということの意味なんです。竹田 いまのお話を聞いていて思ったんですが、さっきいわれた、告発の一番重要な点はそれを「正しくいえるかどうか」にかかっているという点に、非常に共感しました。たとえば、僕は

嫁と姑の話をしました。それは、欲望の道筋と習慣的にある構造の相関性として、権力の抑圧性という問題が出てくるということですね。これはたとえば女性問題でもまったく同じで、女性がごく一般に男の妻となつて、母親となつて暮らしていくというところが当たり前のときには、フェミニズムの問題なんてないわけですね。



だけど、女性が社会的にいろんな道筋の可能性を持ったときに、いまある伝統的なあり方はやっぱりおかしいと思うようになってくる。フェミニズムの運動があることはいいことだし、僕はそれに反対するとうわわけでもないんですが、ただ、正しくいえてないんじゃないかという気持ちがあるんです。つまり、どこに男女の対立の問題の根があつて、どこが一番女性が切実

に痛みを感じていて、なぜそれを変えていく必要があるか、を正しく伝えなければ、けつて男のほうに届かないんです。今のフェミニズムの理論家たちの言葉は、反感と異和感を生むような言い方しかできていないように思っています。『正しく伝える』ということには、差別されている人間が、僕はここが痛むんだ、それは僕だけではないことを、無意識のうちに差別しちゃっているほうに納得させることができるように言えるか、ということですね。

そこではじめて、差別されている側と差別している側との間に合意が成り立って、差別が実在すると言えらるんだと思います。そして、そのとき思想が意味を持つてくるんです。

橋爪 いまおっしゃったことは、思想の存在理由の核心だと思っただけです。思想というのは科学じゃない。客観的に正しいことを、ずっとそれだけ言っているというものは、じゃありません。そうじゃなくて、自分が誰と関係を持つて、これからどういふ社会を作るのかという自分の行動なんです。それが思想だと思っただけです。思想には、それで上手にくいくという見通しの上さや、責任が必要だし、理由もないのにコロコロ変わってはいけません。そういうマナーをふまえたうえで、いろいろな場所にいる人がいろいろなやり方で思想の言葉を語っていくことが、われわれが生きていく生きていくための重要な問題だと思っただけです。

日本経済新聞

1991年(平成3年)4月7日(日曜日)

明快である。いずれの論文も何を言いたいのかが、はっきりしてゐる。なまじつなめるのかを導く論理展開に、無駄な逡巡が一切ない。重要なのは、この特徴が単に文章表現上の問題にとどまらず、この本の「思想」の核心を体現していることにある。『啓蒙は、知的言論を上流、日常語を下流に置いて、知識がその流れを下って行く、とみる。(中略)問題は、その逆で、日常の問題を日常語で考えながら、それによって思想としての表現を与えるのか、なのだ』

現代思想はいま何を考えればよいのか 橋爪 大三郎著

日常性忘れた言論を批判

ら伝わる「疾走感」の源なのだ。著者自身の言葉でいえば思想は、ものを考えることに加えて、そう考えなければならぬという必然の迫力だ、誰でもそう考えていいはずだという一般性をそなえている。そういう必然と一般性とははるエネルギーが、思想を生み出す」という理念である。まず、粗上にあげられるのは、日常生活の場を忘れた近年の日本の知的言論、つまりポストモダン・ズムである。ゲームや「遊戯」としての思想を著者は切っ捨てて、逆に歴史上初めて世界をリードする最先進国となった日本が、必然的に世界との関係を広げていかなければいけない現在、あつたきとなる日本社会の構造の解明に知的言論はいち早く取り組まなければならぬ、というのが著者の主張である。(勁草書房・一、九五七円)

「思索から思想への ヒント